

ユニバーサルデザインに関する知識・意識と 生活意識の検討

— 短期大学生の事例より —

富田 道子 ・ 松岡 依里子

広島都市学園大学 子ども教育学部・大阪成蹊短期大学 総合生活学科

要 旨

本研究は、関西地方の短期大学においてUD知識調査、UD意識調査、生活意識調査を試み、これら調査の関連性の検討から、大学生の「人の多様性」や「共生」への理解を深める方法を探る基礎的資料とすることを目的とする。調査結果は以下の通りである。

UD知識調査では、学生がUDの言葉やその意味を知っていると答えていても、それを利用する人やそこに自分が含まれる可能性にまで思い至っていないこと、UD製品・サービス等の実際が十分理解できていないことがわかった。UD意識調査では、学生にとって、UDが身近な存在として認識されていないことがわかった。生活意識調査では、自ら社会に関わろうとする学生、様々な人とのコミュニケーションがとれる学生が比較的多いことがわかったが、生活意識とUD知識・UD意識の関連性を検討したところ、勉強や大学生活、将来の仕事への向き合い方にかかわる「積極的態度」因子がUD知識・UD意識に寄与することが示された。

キーワード：生活意識、ユニバーサルデザインに関する知識・意識、短期大学生

1. 研究の背景と目的

(1) 研究の背景

いま国際社会は、人権にかかわる教育¹⁾がすべてのコミュニティ、社会全般において推進すべきものであるというコンセンサスを表明してきている。とりわけ、1993年12月20日の国際連合（以下、国連と称す）総会においては「世界人権宣言」第26条が取り上げられ、教育が人間の人格の完成や人権尊重の強化の役目を担っていることが再確認された。これを受ける形で、1995年から2004年まで「人権教育のための国連10年」が定められ、同年4月にはそのフォローアップとして、国連人権委員会において「人権教育のための世界計画」が無投票採択され、終了時限を設けずにフェーズ及び行動計画が策定された。具体的には、第1フェーズである2005年から2007年が初等中等教育、第2フェーズである2010年から2014年は高等教育に焦点を当てた取り組みが進められたのである。今後もこの取り組みは継続される。

さらに、これらの動きと並行するように「障害者の権利に関する条約」が2006年国連総会において採択され、日本は翌年これに署名した（2014年1月に批准書を寄託）。

現在日本は、個々人の多様性を理解し、人権を尊重しようという意識の高まりと、超少

子高齢社会という状況のなかで、「共生」の視点がより強く求められている。

(2) 研究の目的

内閣府は、2008年の関係閣僚会議において決定したバリアフリー・ユニバーサルデザイン推進要綱のなかで、「共生社会」を「障害の有無や年齢といった個々人の属性や置かれた状況に関わらず、国民一人ひとりが自立し、互いの人格や個性を尊重し支え合うことで、社会の活動に参加・参画し、社会の担い手として役割と責任を果たしつつ、自信と喜びを持って生活を送ることができる社会」と定義し、文部科学省は、2012年に開催された中央教育審議会の第80回初等中等教育分科会の配布資料のなかで、「共生社会とは、これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が、積極的に参加・貢献していくことができる社会である。それは、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会である」と定義している。しかし、いずれの定義にも障がい者に対する社会政策の課題（有松、2012）が垣間見えるため、筆者は生活経営学における「共生社会」を「多様な人々が自分らしさを大切にしながら、より豊かな生活を営める社会」とした。その理解を深めるための1つの手段として、これまでユニバーサルデザイン（universal design；以下UDと称す）をキーワードに研究を進めてきたが、将来、社会の担い手となる若者の「人の多様性」「共生」への理解を日常生活・社会生活に対する意識と関連させた研究はない。

そこで本研究は、短期大学においてUDに関する知識調査（以下、UD知識調査と称す）、UDに対する意識調査（以下、UD意識調査と称す）と生活意識調査を試み、これら調査の関連性を検討する。

なお、UDの定義について、米国の建築家で障がい者でもあり、UD 7原則を提案したロナルド・メイスが述べた「UDとは、建物や施設を追加の費用なく、あるいは最低の費用で、障害のある人だけではなく全ての人にとって機能的で魅力的にデザインする方法である。」²⁾ から、筆者は「より多くの人に対する、使いやすい製品、施設、サービス等のデザインのことで、その人の自立を支援し、自由をより可能にするもの」とした。

2. 研究方法

(1) 調査方法

短期大学の学生に、UD知識調査、UD意識調査、生活意識調査を行った。その際、UD知識調査項目については富田・小松原（2012）の調査項目を援用し、UD意識調査項目については地方公共団体やNPO法人が作成した意識調査項目を参考に、さらに、生活意識調査項目については片瀬（1999）の調査項目を参考にして作成した。

なお、UD知識調査では、UD製品やサービス等の認知度を把握することを目的に、「UDという言葉から思い浮かぶものを、具体的に自由に挙げて下さい」という記述式設問も組み入れた。

(2) 調査対象者と対象者の属性

調査対象者は、関西地方の短期大学で「家庭経営学」を受講した1年生男女61名（有効回答率100%）であり、調査時期は2014年7月である。

(3) 調査内容

1) UD知識調査の概要

UDの意味、UD製品やサービス等の利用者の多様さなどを調査項目として盛り込んだUD知識調査を実施した。その際、各項目について「はい」「いいえ」で回答するものとした。また、UD製品やサービス等の認知度を把握するために、「UD」という言葉から思い浮かぶものを具体的に自由に挙げてもらった。

なお、富田・松岡（2015）は、調査項目のなかの「多様な人々」を、年齢、性別といったデモグラフィックな部分の他に、例えば、身体機能障がい者、ベビーカー利用も含めた車いす利用者、身体の負担に配慮する必要のある妊婦や高齢者および見た目ではわからない内部疾患・障がい者、その土地に慣れていない旅行者や外国人なども含めた、社会のなかにいる様々な人と捉える。また「人の多様性」を、人（自分）は生まれてから亡くなるまでの間に、身体的機能の未熟さや低下、予測できない出来事に遭遇することによる一時的あるいは継続的な身体的機能低下、妊娠による身体的擬似機能低下や育児における乳幼児同伴に伴う身体的機能拘束など様々な状況に置かれる、あるいは置かれる可能性があると捉える、とした。

2) UD意識調査の概要

UD意識調査を実施するにあたり、静岡県『平成18年度ユニバーサルデザインに関する県民の意識調査』、特定非営利活動法人いわてユニバーサルデザインセンター『平成18年度県民参加型外部評価システム構築事業に係る外部評価モデル事業』避難場所指定施設に関するアンケート調査結果、三重県『平成22年度三重県UDに関する県民意識調査』、浜松市『平成23年度浜松ユニバーサルデザイン市民意識調査』、東京都『世田谷区民意識調査2011』を参考に、UD意識調査項目を設定した。その際、各項目について「とても当てはまる」「当てはまる」「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」の4件法で回答するものとした。

3) 生活意識調査の概要

片瀬（1999）の「教育と社会に対する高校生の意識調査 第4次調査」を参考に、大学生版生活意識調査項目を設定した。その際、各項目について「とても当てはまる」「当てはまる」「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」の4件法で回答するものとした。

(4) 分析方法

UD知識調査における質問の回答は、基礎統計量と回答の割合で集計し、全体的な傾向を把握した。さらに、UD知識調査の自由記述「UDという言葉から思い浮かぶもの」から、

学生のUD製品・サービス等の認知度を把握した。UD意識調査と生活意識調査では平均値を求め、学生の実態・特徴を把握した。最後に、生活意識について因子分析を行った。さらに、一元配置分散分析を行い、各因子とUD知識・UD意識との相関を求めた。なお、統計解析にはSPSS Ver22を使用した。

3. 結果

(1) 学生のUD知識

UD知識調査結果は図1の通りである。

「7 生活や移動に不便を感じる人は高齢者ばかりではないことを知っている」が73.8%と最も高く、次いで「1 UDを学習したことがある」が65.6%、「2 UDという言葉を知っている」が63.9%であった。6割以上の学生がUDについて一定程度の理解を示す回答をする一方、「3 UDの意味・考え方を知っている」は37.7%、「4 UDのBF (barrier free；バリアフリー) との違いを説明できる」は21.3%、「5 『多様な人々』と『人の多様性』の違いを説明できる」は9.8%であることも明らかとなった。

また、「9 多機能トイレにはどのような機能が設置されているか知っている」は27.9%、「10 多機能トイレは特にどのような人にとって便利なのか知っている」は37.7%の知識や理解を示したが、実際にこのトイレを必要としているオストメイトの言葉や意味については、ほとんどわかっていないということが明らかとなった。

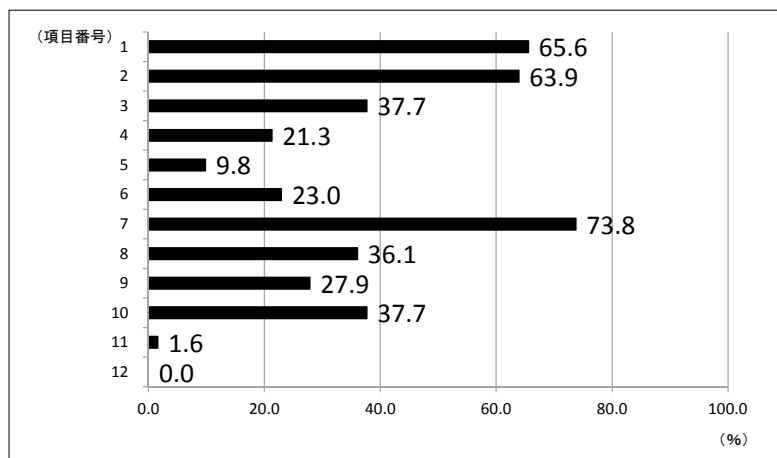


図1 UD知識調査結果 (N=61)

調査項目

- | | |
|---------------------------------|--|
| 1 UDを学習したことがある | 7 生活や移動に不便を感じる人は、高齢者や障がい者ばかりではないことを知っている |
| 2 UDという言葉を知っている | 8 障がいのある人の暮らし方を実際に知っている |
| 3 UDの意味・考え方を知っている | 9 多機能トイレにはどのような機能が設置されているか知っている |
| 4 UDのBF との違いを説明できる | 10 多機能トイレは特にどのような人にとって便利なのか知っている |
| 5 「多様な人々」と「人の多様性」の違いを説明できる | 11 オストメイトという言葉を知っている |
| 6 UD製品は誰が見てもわかるものばかりでないことを知っている | 12 オストメイトの意味を知っている |

(2) 学生のUD認知度 (UDという言葉から思い浮かぶもの)

学生61名に、UDという言葉から思い浮かぶ身の回りのものを具体的に自由に挙げてもらったところ、「シャンプー」「床」というように抽象的な表現をした者が40名(65.6%)、まったく思い浮かばなかった者が6名(9.8%)と、UD製品やサービス等の実際を書けなかった者が7割以上いることが明らかになった。残り15名(24.6%)が挙げた具体的なUD製品やサービス等をUDの特長ごとに分類したのが表1である。UD製品やサービス等が活用されている箇所は、公共施設、住宅設備、生活用品に大別でき、なかでも生活用品に関するものが数多く挙げられていた。ただし、その生活用品はいずれもUDを標榜するものであった。

表1 UDという言葉から想像するもの—UD知識調査 自由記述から—(複数回答)

特長		具体的な回答内容	UD活用箇所 分類	回答者数 (人)
移動し やすさ	段差なくす	スロープ	公共施設 住宅設備	4
	省労力	エレベーター	公共施設	2
	アシスト	手すり	公共施設 住宅設備	3
わかり やすさ	凹凸 つける	点字表示	公共施設	4
		シャンプーボトル	生活用品	3
	視認性配慮	電卓の数字の大きさ	生活用品	1
使い やすさ	省労力	持ちやすい箸	生活用品	1
		持ちやすいスプーン	生活用品	5
		持ちやすいフォーク	生活用品	2
	安全性	押しピンのビニールカバー	生活用品	1

(3) 学生のUD意識

UD意識調査結果は図2の通りである。

全体的にみると、群をぬいて意識の高い項目はなかったが、「4 公共施設・交通機関などの階段の昇り降りは大変だと思ったことがある」「5 駅にある行き先や発着時間などの表示や社内放送などの案内は工夫が必要だと思うことがある」「13 誰もが暮らしやすい社会にすることは喫緊の課題である」など、項目番号4, 5, 7～14について「ややそう思う」と答える学生が一定数いることもわかった。

一方、「2 UDについて、いつも心(気)にかけている」の平均値は1.8ともっとも低く、

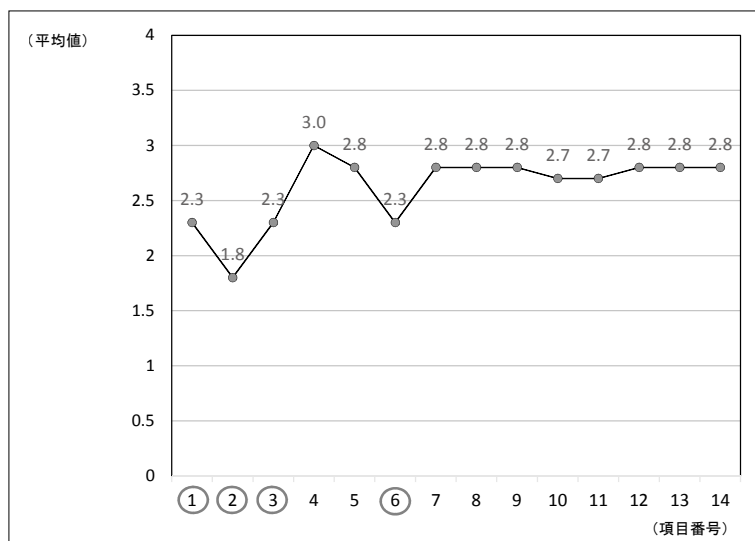


図2 UD意識調査結果 (N=61)

調査項目

- 1 ユニバーサルデザイン (以下、UD とする) を身近に感じている
- 2 UD について、いつも心 (気) にかけている
- 3 日常生活のなかに UD の考え方や UD 製品が浸透していると思う
- 4 公共施設・交通機関などの階段の昇り降りは大変だと思ったことがある
- 5 駅にある行き先や発着時間などの表示や車内放送などの案内は、工夫が必要だと思う
- 6 UD 研究は大学と企業のなかですすめられている
- 7 UD 製品の開発には、ユーザーとメーカーのコミュニケーションが必要である
- 8 学校にも、UD の考え方や UD 設備が浸透してほしい
- 9 学校は地域住民の避難場所になっているので、UD 視点からの配慮が必要だ
- 10 よりよい社会を実現していく上で優先して行うべき取り組みは、学校における UD の教育実践である
- 11 地域によって UD の浸透・普及に差がある
- 12 毎日使う道具、利用する施設設備が適切なデザインであれば、私たちの生活の質は向上する
- 13 誰もが暮らしやすい社会にすることは、日本の喫緊の課題である
- 14 誰もが暮らしやすい社会にするために、私にもできることがある

次いで「1 UDを身近に感じている」「3 日常生活のなかにUDの考え方やUD製品が浸透していると思う」「6 UD研究は大学と企業のなかですすめられている」がいずれも2.3と、学生のUDについての関心はそれほど高くないことがわかった。

(4) 学生の生活意識

生活意識調査結果は表2・図3の通りである。

生活意識のなかで平均値が比較的高かった項目は、「18 私には何でも話せる友だちがいる (3.18)」「31 近所のお祭りに参加したことがある (3.15)」「7 休日は、外へ出かけることが多い (3.05)」「14 親から自分のことは自分でやるよう言われる (3.05)」「48 私たちは、社会のことにもっと目を向けるべきである (3.00)」で、自ら社会に関わろうとする学生、

様々な人とのコミュニケーションがとれる学生が比較的多いことがわかった。

一方、「1 私は自分自身に満足している」の平均値が1.82,「26 まわりの人をまとめて引っ張っていくことができる」が2.00と低いことも明らかとなった。

表2 生活意識調査項目

項目番号	内 容	平均値	標準偏差
1	私は自分自身に満足している	1.82	.695
2	自分には長所があると感じている	2.49	.722
3	時々、自分は役に立たないと感じることがある	2.26	.681
13	私は幼い頃、親からよくほめられた	2.46	.697
4	私は無駄遣いしないようにしている	2.25	.767
5	私は欲しいものやしたいことのために、お金を貯めている	2.66	.873
6	私は、家の仕事をよくしているほうだ	2.13	.718
7	ふだんの休日は、外へ出かけることが多い	3.05	.845
14	私は親から、自分のことは自分でやるようにと言われる	3.05	.669
8	社会の出来事・ニュースについて、親（父・母どちらでも構わない）とよく話をするほうだ	2.46	.848
9	将来や進路のことについて、親（父・母どちらでも構わない）とよく話をするほうだ	2.46	.765
10	私は、親の仕事（家事などを含む）についてよく知っている	2.92	.714
11	親は私に色々なことを話してくれる	2.79	.777
12	親は私のことをよくわかっている	2.89	.755
15	早く親から独立したい	2.64	.817
16	学校（大学）にいる時間が楽しい	2.72	.897
17	学校（大学）の授業は理解している	2.43	.694
18	私には何でも話せる友だちがいる	3.18	.785
19	学校（大学）で様々な勉強をするなかで、幅広いものの見方や考え方ができるようになると思う	2.85	.703
20	私は、これまで学校（大学）の授業以外に、何かに興味をもって調べたり、何かに取り組んだことがある	2.75	.745
21	私が勉強するのは、知識がいざれ生きていくうえで役に立つと思うからである	2.70	.738
22	私が勉強するのは、知識がすぐに役に立たなくても、新しい発見があっておもしろいからである	2.49	.829
23	ふだんの生活のなかで、自分の考えを人にうまく説明することができる	2.31	.672
24	人の話をよく聞くことができる	2.95	.644
25	よく知らない人とも話することができる	2.44	.847
26	まわりの人をまとめて、引っ張っていくことができる	2.00	.632
27	私のまわりには、親以外に、道で会ったら挨拶をしてくれる大人がいる	2.95	.805
28	私のまわりには、親以外に、信頼できる大人がいる	2.66	.892
29	私のまわりには、親以外に、尊敬できる大人がいる	2.67	.870
30	私のまわりには、親以外に、気軽に相談できる大人がいる	2.64	.913
31	私は、近所のお祭りに参加したことがある	3.15	.771
32	私は、公園や道路などの清掃、地域の避難訓練などに参加したことがある	2.28	.951
33	私は、児童館や公民館などが開催した講座や教室に参加したことがある	2.20	1.030
47	私は、家庭やボランティアで高齢者の介護を手伝ったことがある	2.07	.892
50	私は社会の一員として、何か社会のために役立ちたい	2.66	.772
34	40歳くらいになった時、私は世の中の役に立つ仕事に就いていると思う	2.26	.681
35	40歳くらいになった時、私はやりがいのある仕事をしていると思う	2.51	.788
36	40歳くらいになった時、仕事以外の仲間や友だちと親しく付き合っていると思う	2.97	.657
37	40歳くらいになった時、会社員や公務員などの勤め人として働いていた	2.20	.749
38	40歳くらいになった時、会社の経営者として働いていた	2.23	.716
39	40歳くらいになった時、医師や看護師、先生など、資格を生かした仕事をしていたい	2.08	.759
40	40歳くらいになった時、技術・職人など、専門的な技能を生かした仕事をしていたい	2.34	.728
41	40歳くらいになった時、芸術・スポーツなど、特別な才能を生かした仕事をしていたい	2.10	.768
42	生活ができれば（経済的自立ができれば）、職業や仕事の種類にこだわらない	2.20	.813
43	40歳くらいになった時、家事や育児などに専念していた	2.48	.849
44	私は働かないでいたい	1.89	1.002
45	私は、今の日本社会に満足している	2.00	.658
51	私は、今の日本社会には思いやりのところが育まれていると思う	2.48	.698
52	私は、今の日本社会は公平だと思う	1.89	.608
53	私は、今の日本社会は多くの人が自立した生活を送れていると思う	1.92	.586
46	私は、社会問題に関心がある	2.34	.728
48	私たちは、社会のことにもっと目を向けるべきである	3.00	.632
49	私たちは、個人生活の充実をもっと重視すべきである	2.72	.636

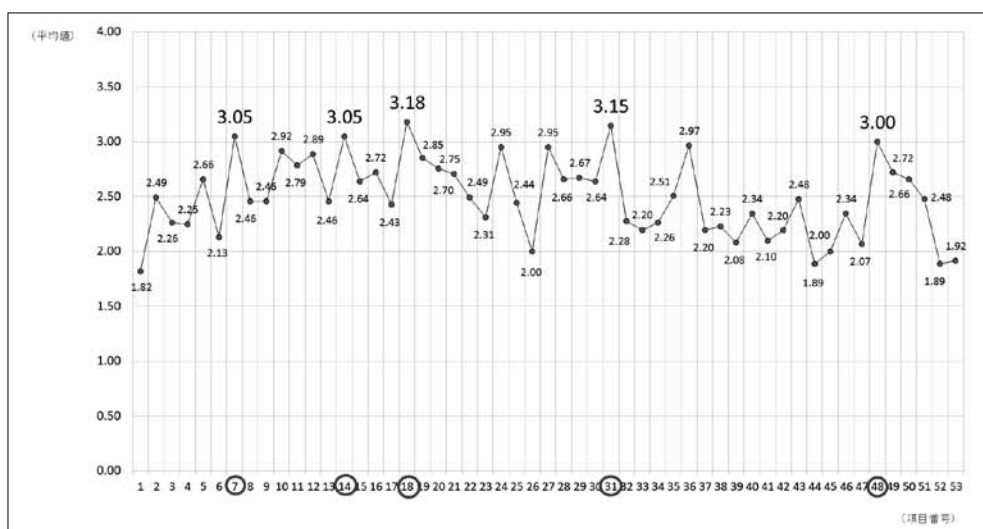


図3 生活意識調査結果 (N=61)

(5) 生活意識の因子分析

生活意識調査の53項目の平均値、標準偏差を算出した(表2)。天井効果及びフロア効果のある項目を検討したが、いずれの項目もみられなかった。次に因子分析(主因子法、回転なし)を行った結果、固有値の減衰状況(9.951, 3.891, 3.568, 2.983, 2.627, 2.598・・)から6因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度6因子を仮定して、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、十分に因子負荷量を示さなかった5項目を除外し、48項目について再度、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。最終的な因子分析パターンと因子間相関を表3に示す。これら全分散の説明率は56.50%であった。

第1因子は、勉強や学校生活、将来の仕事への向き合い方にかかわる「積極的態度」因子、第2因子は、親や友だちとの関係にかかわる「コミュニケーション」因子、第3因子は、社会参画にかかわる「社会的自立」因子、第4因子は、社会の公平さや人々の自立度・満足度にかかわる「社会的包括意識」因子、第5因子は、家事・育児と仕事の関係を考える「生きがい感」因子、そして、第6因子は、自分の役立ち感や自己肯定を示す「自尊心」因子と命名した。

(6) 生活意識とUD知識・意識との関連性

さらに、生活意識の各因子得点とUD知識・UD意識の高低との相関を求めるため、一元配置分散分析を行った。その結果、UD知識については、「積極的態度」因子との相関において、F自由度(1, 57)のF値が7.42, 1%水準で有意であった。また、UD意識についても「積極的態度」因子との関連において、自由度(1, 58)のF値が7.99, 1%水準

表3 生活意識 因子分析結果

因子名	第1因子 積極的 態度	第2因子 コミュニ ケーション	第3因子 社会的 自立	第4因子 社会的 包括意識	第5因子 生きがい 感	第6因子 自尊心
勉強は新しい発見があっておもしろい	.923	-.155	-.188	.116	-.051	.025
親以外に、尊敬できる人がいる	.670	.084	.102	-.124	-.028	.125
学校で幅広いものの見方や考え方ができるようになる	.653	-.166	-.038	.160	-.084	.128
知識はいずれ生きていくうえで役に立つ	.651	.107	-.006	-.042	.315	-.252
授業以外で興味をもって調べたり取り組んだことがある	.626	.020	.054	-.239	.145	.057
親以外に、信頼できる人がいる	.600	.403	-.041	-.028	-.111	-.024
社会のことにもっと目を向けるべき	.587	-.059	-.068	.026	-.196	-.009
学校にいる時間が楽しい	.536	.155	.069	.146	-.012	.025
学校の授業は理解している	.504	-.041	-.235	.044	.245	.121
何か社会のために役立ちたい	.484	-.081	.215	.297	.219	.058
高齢者の介護を手伝ったことがある	.459	-.014	.124	-.239	-.047	-.200
親以外に、気軽に相談できる人がいる	.451	.327	.115	-.253	-.134	.122
勤め人として働いていたい	.417	-.114	.004	-.069	-.284	.095
資格を生かした仕事をしたい	.389	-.064	.305	-.182	-.193	-.335
いま、社会問題に関心がある	.357	.100	.190	-.124	.145	.185
近所のお祭りに参加したことがある	.337	.215	.175	.091	.009	-.067
特別な才能を生かした仕事をしたい	.323	.194	-.019	.117	.129	-.035
親は私のことをよくわかっている	.083	.827	-.251	-.192	-.007	-.015
親は私に色々なことを話してくれる	-.125	.809	.030	-.024	.118	-.031
将来のことについて、親とよく話をするほうだ	.080	.764	.146	.050	-.041	-.122
社会の出来事について、親とよく話をするほうだ	.028	.608	.038	-.046	.018	.149
私は、親の仕事についてよく知っている	-.217	.522	.291	-.062	.092	.033
何でも話せる友だちがいる	-.003	.473	-.303	.369	-.005	.050
私は幼い頃、親からよくほめられた	.010	.354	-.069	-.077	-.086	.279
休日は、外へ出かけることが多い	.306	.321	.050	.153	-.121	-.225
仕事以外の仲間と付き合っていると思う	.134	.318	.114	.226	.266	-.056
清掃、地域の避難訓練などに参加したことがある	.127	-.028	.676	.059	-.030	.117
まわりの人をまとめていくことができる	-.259	.152	.598	.220	.048	.123
児童館や公民館開催の講座に参加したことがある	.339	-.065	.594	-.001	-.208	-.047
会社の経営者として働いていた	-.180	.118	.579	-.207	.359	-.065
よく知らない人とも話をすることができる	.034	.352	.482	.062	-.237	.038
専門的な技能を生かした仕事をしたい	.289	-.194	.432	-.046	.048	.107
私は無駄遣いしないようにしている	.299	.038	-.398	-.214	-.066	.255
早く親から独立したい	-.051	-.222	.352	-.214	.320	-.088
今の日本社会は、多くの人が自立した生活を送れている	.037	-.138	.110	.672	-.212	-.041
今の日本社会には思いやりのところが育まれている	.252	.006	-.055	.637	.088	.052
今の日本社会は公平だ	-.247	.053	.135	.610	-.103	.152
社会に役に立つ仕事に就いていると思う	.058	-.056	.143	.547	.533	.038
今の日本社会に満足している	-.059	-.040	-.190	.369	.005	.016
個人生活の充実をもっと重視すべきである	.325	-.187	.211	.357	-.124	-.150
やりがいのある仕事をしているをしていると思う	.064	.033	-.063	.355	.657	-.101
家事や育児などに専念していきたい	.213	-.073	.040	.123	-.597	.081
働かないでいたい	-.360	.005	.017	.185	-.512	-.246
人の話をよく聞くことができる	.036	-.061	.044	-.108	.374	.173
誰かの役に立っていると思う	-.011	.063	.249	.294	-.185	.749
自分には長所があると感じている	.103	.041	-.033	.097	-.011	.736
私は自分自身に満足している	.064	-.073	-.036	-.027	.055	.568
生活ができれば、職業や仕事の種類にこだわらない	.125	.004	-.251	.236	-.305	-.436
因子間相関	I	II	III	IV	V	VI
I	—	.381	.294	.190	.246	.050
III		—	.238	.149	.280	.239
IV			—	.158	.116	.030
V				—	.184	.001
VI					—	.153

表4 生活意識「積極的態度」因子とUD知識・意識の相関

		平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
UD知識	グループ間	6.595	1	6.595	7.415	.009
	グループ内	50.698	57	.889		
	合計	57.293	58			
						F (1,57) =7.415, p<0.01
UD意識	グループ間	6.992	1	6.992	7.989	.006
	グループ内	50.765	58	.875		
	合計	57.757	59			
						F (1,58) =7.989, p<0.01

で有意であった(表4)。つまり、UD知識、UD意識ともに積極的態度因子との間に相関がみられ、その他の因子との間には相関がみられなかった。

4. 考察・まとめ

本研究は、関西地方の短期大学においてUD知識調査、UD意識調査、生活意識調査を試み、これら調査の関連性の検討から、大学生の「人の多様性」や「共生」への理解を深める方法を探る基礎的資料とすることを目的とした。

UD知識調査では、学生がUDの言葉やその意味を知っていると答えていても、それを利用する人やそこに自分が含まれる可能性にまで思い至っていないことが明らかになった。また、UD製品・サービス等の実際を知っている者は限られ、そこで具体的に挙げたものはUDを標榜するものに限られていることもわかった。その背景として、小学校において高齢者疑似体験、高齢者や障がい者との交流、学校環境をUD視点で点検するといった取り組みが社会科や総合的な学習の時間、道徳などでなされていても(佐賀県, 2013)、その到達目標が「困っている人や高齢者への思いやり・心遣い」といった心情的理解に留まっていることが推察される。

また、UD意識調査では、日々の生活を営むことに特に不自由を感じない学生にとって、UDが身近な存在として認識されていないことが明らかとなった。しかし、「4 公共施設・交通機関などの階段の昇り降りは大変だと思ったことがある」「5 駅にある行き先や発着時間などの表示や社内放送などの案内は工夫が必要だと思うことがある」「13 誰もが暮らしやすい社会にすることは喫緊の課題である」など、項目番号4, 5, 7～14について「ややそう思う」と答える学生も一定数おり、UDを身近に感じたり気にかけたりしていない学生は多いものの、社会的な課題として捉えようとしていることが推察される。

さらに、生活意識調査では、自ら社会に関わろうとする学生、様々な人とのコミュニケーションがとれる学生が比較的多いことがわかったが、「1 私は自分自身に満足している」「26 まわりの人をまとめて引っ張っていくことができる」の平均値の低さから、自尊心の低さやリーダーシップを発揮することに自信がないこともうかがえる。

最後に、生活意識とUD知識・UD意識の関連性を検討したところ、親や友だちとの関係にかかわる「コミュニケーション」因子、社会参画にかかわる「社会的自立」因子、社会の公平さや人々の自立度・満足度にかかわる「社会的包括意識」因子ではなく、勉強や大学生生活、将来の仕事への向き合い方にかかわる「積極的態度」因子がUD知識・UD意識に寄与することが示された。

5. 今後の課題

本研究におけるUD知識調査、UD意識調査、および生活意識調査の結果は暫定的なものであるが、この結果をもとに仮説を再構成し、UD知識やUD意識、生活意識の調査項目を精微化して、調査対象者を全国の教育・福祉系大学に広げ、生活意識の相違とUDに対する考え方の関連についてデータを蓄積する必要がある。鈴木ら（2013）の指摘する「家政学や生活経営学においても1990年代になって『共生』『共生社会』の用語が使用されてきたが、断片的であり、家庭科に『共生社会』が位置づいたことに関係している様子をうかがうことはできない」を乗り越えるものとして、さらに高等教育、とりわけ生活経営学における大学生の「人の多様性」や「共生」への理解を深めるために、どのようなアプローチをすることが可能なのか、継続した研究が必要であると思われる。

【附記】

本稿は、一般社団法人日本家政学会第67回大会（2015）の発表内容に加筆したものである。

注

- 1) 国連総会における人権教育の定義は、「あらゆる発達段階の人々、あらゆる社会層の人々が、他の人々の尊厳について学びまたその尊厳をあらゆる社会で確立するための方法と手段について学ぶための生涯にわたる総合的な過程である」としている。
- 2) DESIGNERS WEST, vol.33, No.1, Designers World Corp, November1985におけるロナルドメイスの論文の一部が、川内の要約によって示された。川内美彦, (2002), ユニバーサル・デザイン：パリアフリーへの問いかけ, 京都：学芸出版社。

参考文献・引用文献

- 有松 玲. 障害者政策の現状と課題：制度改革の現況分析を通して. Core ethics, 2012, 8, 1-11.
- 片瀬一男. 教育と社会に対する高校生の意識調査 第4次調査（高校生用調査票）. 東北大学教育文化研究会, 1999.
- 佐賀県くらしと教育・現場発の取組支援. UD教育推進校の取組紹介. (http://www.pref.saga.lg.jp/web/kurashi/1018/ik-genba/_1383.html 2013. 7. 25アクセス)
- 鈴木敏子, 山田美砂子. 2009年改訂「高等学校学習指導要領」の共通科目「家庭」の内容に位置づけられた「共生社会」についての考察. 生活経営学研究, 2013, 48, 51-60.
- 富田道子, 小松原明哲. ユニバーサルデザイン教育プログラムの開発：高等学校家庭科における試み. 人間生活工学, 2012, 13, 1, 48-54.
- 富田道子, 松岡衣里子. 家庭科ユニバーサルデザイン学習手引き書の有効性の検討：小学校教員への試み. 日本家庭科教育学会誌, 2015, 58, 2, 100-109.